

他科の先生に
知って欲しい

豆知識・・・眼科編⑬

緑内障に関係する薬剤について

倉敷中央病院 眼科 顧問 岡田 守生



緑内障の患者さんから、風邪薬を服用してよいですかと尋ねられたり、内視鏡検査をするので内科の先生からブスコパン等の抗コリン薬を使用してよいか眼科の先生に尋ねるように言われた等、緑内障患者さんへの投薬についての質問を受けることがあります。

緑内障禁忌薬や原則禁忌薬、投与に注意を要する薬剤は、概ね2種類に分けられます。第一に、抗コリン作用薬などの散瞳作用がある薬剤、第二はステロイド剤です。

緑内障では眼内に分泌される房水の流出が阻害されて眼圧上昇を来すのですが、抗コリン作用薬の副作用で眼圧上昇を来すのは、通常、隅角（虹彩最周辺部と角膜後面周辺部が形成する角の部分）が狭い眼である「狭隅角眼」です。狭隅角眼で散瞳が起こると、もともと狭い隅角がさらに狭くなり、その結果として房水流出が妨げられて眼圧が上昇します。このメカニズムによる眼圧上昇は、狭隅角眼の緑内障である「閉塞隅角緑内障」だけでなく、緑内障を発症していない狭隅角眼である「閉塞隅角症」や「閉塞隅角症疑い」でも同様に起こる可能性があります。

高度の隅角閉塞が突然起こると、急激に高度な眼圧上昇をきたし、視力低下、眼痛、充血、頭痛、嘔気などの症状が起こります。一方で、閉塞隅角緑内障と診断されていても、虹彩切開術や白内障手術が施行されている眼では通常は隅角閉塞が起こらないので眼圧上昇をきたさないと考えられます。抗コリン薬を使用される場合は、緑内障の有無を確認されるとともに、緑内障の病型、虹彩切開術や白内障手術が施行してあるかどうかを眼科医にご確認ください。

ステロイドの副作用によって、眼圧上昇を来しステロイド緑内障を発症することがあります。これは、隅角の広さに関係なく起こります。ステロイド投与による眼圧上昇は感受性に個人差があり、眼圧が上昇する人を「ステロイドレスポンダー」とよびます。閉塞隅角眼に起こる急激な眼圧上昇では症状が顕著ですが、ステロイド緑内障では明らかな症状が現れにくいものです。

ステロイドによる眼圧上昇は、点眼や軟膏だけでなく、内服、点滴などでも起こり得ます。ステロイドの大量投与や使用期間が長期にわたる場合は、当該科の先生から眼科に紹介されますが、アレルギー性結膜炎に用いるステロイド点眼を処方される場合やアトピー性皮膚炎でステロイド軟膏を使用される場合等では、長期間使用されていても眼圧チェックがされない場合もあると思われます。このような場合、ステロイド緑内障が発症していても発見されず、視野障害を来すこともあるので注意が必要です。